凶悪犯罪が増えている？

昔はよかった、ですか？

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

「凶悪な犯罪が増えている」「少年犯罪が低年齢化して増加している」「外国人犯罪が増加している」……と思っていませんか。

先日、犯罪統計の専門家を講師にお招きしたセミナーがありました。じつは、そのようなことはまったくないのだそうです。意外ですか？

だって、新聞やテレビでは連日、そうした犯罪事件があいついで報道されているじゃないか、と思われることでしょう。でも、犯罪統計を正しく読めば、そうした事件も昔からたくさんあったことで、現在はむしろ減ってきているというのです。

その講師の方は折々に政治家たちの前でもその事実を指摘されるそうですが、ほとんど、「そんなはずはないだろう」と決めつけられておわるのだそうです。

☆★☆

『オールウェイズ 三丁目の夕日』という映画がありました。敗戦の痛手から立ち上がり高度成長を担っていった日本の庶民の生活を描いたものとして、人気を集めました。「古き良き時代」といえば、その頃をまず思い起こす方も多いのではないでしょうか。

しかし、当時も今に劣らず衝撃的で痛ましい事件はたくさんありました。

誰もが「昔はよかった」と思いたがるわけですが、それは、単なるノスタルジアだけでなく、現在の私たちが、将来の暮らしのことや、未来にどんな希望を持てばいいのかが見えないことの不安が投影されているように思います。

犯罪に対する重罰化や死刑乱発の動きは、その不安を解消するものではなく、いっそう募らせるものです。

★☆★

こんなお話もありました。

「少年犯罪はむしろ高年齢化していることが問題です。それはどういうことかというと、以前は暴走族のような場合でも、ある年になったら、そろそろ引退して堅気になる、というような習慣がありました。ところが、今、引退したって行くところがないわけです。不良を続けるしかない。社会がどこも受け入れようとしない人たちに、ここには来るな、と拒めない施設として刑務所があるわけですから、刑務所が満杯にもなるわけです。」

犯罪報道が世間の耳目を集めるたびに、重罰化や死刑の適用が声高に語られます。しかし、そもそも、その犯罪と刑罰の実態自体が誤まってとらえられているのではないでしょうか。